独占研究の方法(続)

見　野　貞　夫

結びにかえて　現代史を理解するわたくしの最近かかわっている見解の一環として，本稿も方法論的にかいてみた。独占とこの議論をめぐる見解に関して，方法自覚的に肝心なことがらとしてわたくしの保持してきた点は，たえず交替運動にさらされる資本内の上下位階，独自の経済関係として，独占をとらえるだけではなく，この上下関係が当然にそこまでのびてコミットするはずの下部単位を，たんに構造内単位にかぎらないで，構造外単位をも，独占を構成する不可欠の経済関係にくいこみ，法則を確証することにある。

独占を支え，これを再生産するのは上下位階の下部であるが，この下部はもともと破産企業である。これは二つあり，一つは，勝ちほこった資本の庇護下に再び資本として，かつての道をあゆむ下請企業，更生資本であるけれども，資本家を失い労働者が従来の事業を管理する，いわば自主生産の資本，自主管理の企業が，もう一つの破産資本の変型である。後者には，企業再開にそなえてつなぎの労働経営組織と，単独自立の労働組織体との二つが細別できる。国際関係に作動範囲をひろげた二つの単位こそ，労働者政権の非同盟中立の諸国と，いわゆる一国社会主義国家である。独占資本を破産企業と，資本制独占を二類型を含む労働者私有主の経済組織と，不可欠分に一体として結びつけ，独占理論の構築，独占の理解にあたり，これを，いつどこでも緊張して意識的に保持する方法論たらしめるのがここでの特徴の一つである。

二つが一体なのは，理論の構成に模写し定位する客観的論理が強く迫ることかがらであるのみならず，資本制独占または国家独占資本主義が，労働者単独政権の経済組織なり一国社会主義の生産制度にまつわりつくように，現代史にも，この一角は何びとにも否定しがたい経験的現象として鮮明に露出している。これをうつしとるまでのことである。これが一つの論点である。

第2には，労働と資本の私有主といった面相を異とするが，構成単位が上下の位階にたつかぎりでは共通な二類型の独占は，迂遠な方面でのことがらにとどまらず，眼前にごろごろしている日常の諸現象にも，内在法則を無差別に浸透しているだけに，大きくは国際現象にアプローチするのと同一のウエイトをかけて，小さくは，日常の瑣末事にも分析を加え，法則を確証しなければならないということであろう。人見知りをしない商品の水平主義的性格よりもはるかに，経済法則は，徹底して普遍的であり，人のみならず，ときとところのすべてに無関心であり，まさに無差別主義であろう。小さなことがらに，独占構造の経済的本質を確証し，これを通して知を力にかえ，発展と進歩の内在論理のたどるのと同方向で歴史的に独占に再びコミットする必要を，格別に方法意識とし，これに心がけたのがここでのもう一つの論点である。

第1の論点については，単独政権または一国社会主義のほうにひきつけて，資本制独占との不可分の関連で論定する積極的見解を，最近，方法論の地平にとどまるとはいえ，主張としてかきぬいておいた。独占を理解したり帝国主義の国際関係を論じたり国家独占資本主義論を検討するには，破産資本を，それも構造内非独占から，構造外の二つの非資本類型にいたるまで，また従属国，このほか労働政権の自主独立国を，それも非同盟諸国から一国社会主義にいたるまで，こうした下部単位を，独占資本主なり資本制独占に養分を供与するものとして，有機的に関連づけて考察する必要はある。しかし，こうした考察はおろか，中国とかソビエトロシアとのかかわりを何一つ論じない独占資本主義理論もあれば，破産の非独占を構図にいれてこない独占理論もけっしてすくなくない。このほうが通例である。仮設と現実切断をこととして専門主義の近代経済学ならばともかく，運動を模写することを方法としてかかげているマルクス経済学にも，この弊がないとはいえない。

一般に，現況はといえば，独占は資本制経済のことであり，一国社会主義は，これと社会的システムを相異とにするのみならず，むしろ資本に，したがって独占に対決する諸力として，社会主義に属する領域だから，直接には無関係であり，職分に応じて作業があるのだから，区分と裁断は当然のことだとし，これがかえって，アカデミズムを高めるのだといわぬばかりである。独占と破産資本，これを細胞とした国際現象として，国独資と一国社会主義——この経済関係を，人びとは，無自覚に区分しはするが，関係なきものと位置づけているから，通常，区分の方法意識さえもないのではないか。

市井の書籍市場には，例外なく，社会主義論に関しては，資本主義経済—社会主義社会—共産主義社会を，歴史の先進順序として，これに米国—ソ連(中国そのほかの単独労働私有の諸国を含む)をふりあてた無知蒙味の品質商品，愚民政策用の財貨が横行し，目下，販路をにぎわせている。国際的にまた世界経済では，こう考える善良な論者も，この現象の細胞形態をなす，独占資本と自主独立の破産企業を，史的進歩の順序におく人びとはまずはない。むしろ，破産企業を資力において資本一般の洪水に没し，絶命した後進の不幸な企業単位だと，正当にもみている。労働者が経営権をにぎり，自主管理をしているからといって，これを史的前進に直結すると述べる論客は皆無である。無作だが，これは正しいのである。しかし，こと世界の構図のなかでは，奇異にも，労働者が政権をもつことが資本制経済を脱却し，私有をうちはらったメルクマルと考えて，史的座標では，無条件に資本関係よりも何歩かリードしているかのようによみこみ，とりちがえる。細胞でつきとめた生理学的認識とか生化学的確証に，この細胞から成る器官の認識と確証が一致しないのはそもそもどういうことだろうか。一般の科学，とくに自然科学では，これは通用するだろうか。否，この不条理は一瞬としても，残らない。けれども，社会科学とくに経済学，それも科学として最良の良心をもつマルクス経済学が，この不条理に気づかないで無感動であり，不敏なのは一体，何ゆえだろうか。

一国社会主義と独占の特異な歴史的論理的接合にたいする，とらわれない科学的分析の欠落は，マルクス経済学を随分と不毛にし，ありうべき進歩から大はばに後退させているし，感性的実践としての人間存在を模写し，将来の歴史にコミットする方向をもうちだすことに大きなメリットを有する知的体系を，この性格から逸脱し，展望を欠いた，おさきまっくらの状態に追いこむことになっている。将来への展望なく，歴史の論理に鈍く，人びとの行為が多くのロスと空転を随伴し現代史から概念が消失するとき，そこにあまりにも多弁な言だけが群生し，本質究明の欠落を再生産し，いっそう蒙昧なドグマティズムを分泌する。多弁はアジテーショナルになり，資本の危機というコトバが旺溢する。まさに，理論分析自体が独占の体質にそっくりに転じ，前進を約束する私有単位，たとえば資本の間に介在する左右の私的淘状が上下位階の淘状に化する独占のように，危機についての冗舌は，それを変革する活動と結びつかず，史的前進に連動しない。いうまでもなく，資本関係とこれをのりこえる諸関係との間に，一体どのような赤い糸が，いかなる

構成で定位しているかをつきとめないからであり，つきとめていたならばおのずと，この連鎖の一環にある資本制独占と一国社会主義の一卵性双生児性格を，十分に科学的に理解できたはずであろうからだ。危機をさけぶ論者は弁の内実に責任をとって一刻も裕余せずに，この赤い糸なり歴史の連鎖をうきぼりにしてほしいものであるが，これがおよそないというデマゴークとしての論客は論外である。歴史は，こうしたアジテータをえり分け淘汰して，デマゴークをヴァンドームからのみならず，またアカデミズからはもとより，評論の世界からも，ころげおちるよう方向づけるであろう。

だがしかし，資本制独占と一国社会主義の経済関係が不可分であることへの無理解は，更には，一国社会主義が破産企業が進むべきありうべく一つの道として，労働者単独の私有経営であることを，細胞本質としてみないからであり，そもそも細胞構造の把握が欠けているからである。この論点が次の論題である。

第2の論点は，現状が第1の論点よりもずっと，多く欠けているだけに，強調し自覚を高める必要があるだろう。

独占資本主義論即帝国主義論といった従来の見解が支配を誇るもとでは，帝国主義戦争は列強単位の国際的格闘であり，国内に介在する独占的集中もすべて，国際戦争に集約できるか，国内現象にとどまる独自な現象と理解する場合でも，企業とか事業組織といった次元のかなり高く，そして原基だけれども，抽象的にすぎる経済現象的性格のものだけがとりあげ考えられたり，また位置づけられてきた。だが，独占（集中）と帝国主義戦争はまったく本質上同一であり，相異があるとすれば，細胞と器官の関係に類して，本質確証には無縁の形態，考察の範囲にすぎない。帝国主義戦争が国内の独占的集中に影響を与えるというよりは，国内のさまざまな諸事件，事象をまとめる資本集中の格闘が，帝国主義戦争あるいはこの変型として発現するのだといったほうがよいであろう。資本の私的事業に共通する独占行為がまとめる例の諸事象には，価格の規制，市場操作，価格の格差化から新規参入者の阻止にいたるまでの企業の行動パターン，そして，日常，主婦のかかわることがらなどすべての現象を含む。独占が巨大な力を有し支配の範囲を拡大するのは，この再生産養分として構成単位の上下分断の関係を整備することによるが，この整備の度合は小さな事象ほどもらさず細かく点検し，独占の衝動を貫徹させる不撓の執拗な努力にもっぱら依存する。金もちほど細(こま)かいという俚言，金はたまればたまるほど，きたなくなる俗言のように，独占のゆる

がない確立は,輩下単位の上下分断を,いかほど下部単位のすみずみにわたって徹底し，支配にとってのもれ (leakage) をいかに残さないかの注意ぶりに依存する。

政治現象はすぐれて経済現象であり，古来から，最高の政治(まつりごと)は最強の商(あきない)である。両者の間には,法則作用に不平等があるわけはない。これを分析し体系づける人格も，このことに対応して,固有な政治家(ステートマン)は最高の経済学者であり，治策の最大限に確実な分析学者は政治の手がたいまたとない解剖学者である。両人格の最高峰が相互に求め合い，そしていっそう高め合うのは，政治と経済に，同一の論理が内在し，貫徹しているからであり，しかもこの領域の法則に，この人格が模写すべく的確にコミットしていることにもとづくものであろう。政治は経済の集中的表現であるように，政治家は経済学者の完結した社会的人格である。経済は政治によじのぼってはじめて，自己を充足しきる。日本語でも，政治は，はかりごと(祭もその手段)をもって，大衆を治めることであるが,これは,まさに内容を経国済民としたこの外皮である。政治と経済の相互関係を律する客観的論理に変化があろうはずはないけれども，コミットする人格がこれを模写する正しい位置に定住していなければ，高める方向で求め合った両人格は，逆に，足をひっぱり合う方向で生半解な能力じみたものを過剰たらしめて切削し合うことだろう。学者すぎる政治家とは策士(ポリティシャン)のまたの名であり，政治家すぎる経済学者はねぎり屋(イコノミスト)の別称である。これは,政治と経済をつらぬく同一の客観的論理を正確にうけとめる科学的人格でなく，更には,不十分な洞察力の欠落のためにさけられないであろう。

また，独占体の主体的努力，政策的営為のみならず，この営為が立却する法則も，今日の多国籍企業や国家間企業，超国家的事業から，諸国の日常的食料事情にいたるまで，単位を選別せず，ところをきらわず，すみからすみまで無差別に，自己を貫徹しているはずである。そうだとすると，大きく高踏的な問題だけが独占にとって大切なのではなく，市井の現象もこれにまさるとも劣らず，無視できない肝心なことがらである。小さなことが分明にならずして，どうして大きな問題が論じえようか。細かい問題だと高圧的にかまえるのは，大きなことが分らないのみならず，小さなことすらもわがものとしていない確実な証左であり，これをつくろう犬の遠ぼえの類か，現実を分析しきらない非力をかくした遁辞でしかないだろう。

政治現象と経済現象を切断する考え方に特有なよく目につく例としてあげ

てよいのは，国家を，民間に対置し価値法則の作用外におく資本制経済理論とか，戦争を何かしら国際関係のフリクションとみなして，それ自体ブルジョア社会，それも独占段階の経済的因子の一つにすぎないはずの国家が民間単位を代表し，これに供与する一般的基礎財を求めて国家外の単位とかかわり合う私的事業（国家の私人がおこなう作業）と科学的に位置づけない考え方などであろう。だがしかし，スミスは，来るべき自由競争の経済関係を将来社会の変型に求める段階であったけれども，すでに国家のこうした物神的理解からのがれており，国家もある種の独自的商人，ぬけ目なく放置しておけば生馬の目もぬきかねない私有の経済単位と位置づけて，民間内単位間の関係を，民間全体と国家との間に適用して，民間を国家が divide and rule する以上に，これにまさるともおとらぬ程度で，国家を民間が divide and rule する必要を説き，私有単位の最後のまとめの次元における単位すべての間に生まれる価値平等の関係を行きつく法則とみなし，これを固め確立すべく提唱している。また，レーニンも，国家を一つの私有のシンボルとみなし，掠奪の行動をこととする私単位にみたて，この行為の一つを，独占段階の帝国主義戦争にみつけた。この原基を，レーニンは逆に，独占に，したがって集中が集積をうちやぶる私的部分形態に求めて，独占の集中した総体次元の問題と，分散した個別次元の問題を，差別を知らずに，同一の法則で連結したのである。

一見，こう思われるように，社会経済問題としてだけ，独占はあるのではない。社会科学がとりおさえた現象すべてがそうであるように，市井の日常事情に確証してこそ知識は普遍性をかちとり，実践知（行為知）になる。知を通して行為は認識の客体になる現象の作出にコミットしうる。もともと，人間は，行動する動物であり，自然との関係を補足して，個体をもう一つの客体として，社会関係をもった動物であり，自意識を生産し所有する動物である。関係があるから，自省があり，自省があるから，自己に関する意識のほかに，客体すべてに関する意識として知識は生まれる。この知識をもって，行動に実証し結晶するとき，行動のみならず，知識自体も大きくふくらむ。知識の入手と投与は，人間に特有な社会的行為であり，現実生活の連環でもある。細かいことがら，小さな事件にもみえても，経済の法則は，われ関せずにひとしく貫徹し，一寸の虫にも5分の魂が宿るかぎり，そこに法則を確証し，魂をみとめることこそ，知識の生産を一部構成因として含む，社会行為を前進させるゆえんであろう。

社会経済を研究客体としてつきはなし,マクロ現象としてとらえる認識は,どちらかといえば,内在的本質を大うつしにし,現実像をひろげひき伸ばす作業を固有にうけもっている領域であるから,知識はたしかになるが,それだけかえって,ここは行動からはもっともかけはなれた位置にある。逆に,人びとの行動にもっともふさわしい現象,生活局面は,日常の事件,個人の生活が定位する複雑なミクロの領域である。何ゆえかといえば,行動は,個人に結びついており,個人を通してしか,発現しない。けれども,またそれだけにかえって,認識に不可欠な全像の理解は,このかぎりでは制限をうける。認識の確実なところには,さしあたり個的行動は消えるが,この行動のあるところ逆に,全的認識は制約をうける。しかし,生活は二つをつないで無限の円環たらねばならない。認識においては,マクロはミクロを,社会経済的現象は日常事件を包摂するけれども,生活のもう一つの大切な側面,つまり行為では,逆に日常性が社会を内蔵する。二つの相互媒介が可能性にとどまらず,必然的であるのは,一事が万事といわれるように,社会経済的現象を規律している法則は,同一の性格で,日常事件にも貫徹し実現化し,けっして作動を惜まないからである。更には,感性の行動としての人間が感性客体としての人を含むように,行為が日常事にあるとはいえ,否,ミクロの反復する瑣末事であるがゆえに,すでにかちとった認識(知識)だけではなく,これを行為のなかに投入して,実践に化し燃焼材料とする行為をも含むのであり,行為が生活であるかぎり,ミクロのこの局面こそは現実の生活である。個は全の,間は人の,活動は感性の,ミクロはマクロの,行為は知識の本質的基礎である。人びとがともにかかわる社会経済問題と日常事件の確定は,現象を理解する知識と,この知識の定立および実証,更には,これをまとめる生活行為,この二つを固有な作業領分とする分業関係として,さしあたりは,マクロ的に人びとの知識を明確にする派生次元の所産と,個人にじかに結びつくミクロの関係にして,変化にとみ個別的であるが,決定的な因子として運動源を保持する領域,更に誇張して,行為から遠ざかったにせよ,現象の的確な理解と,それ自体,理解に欠けるが,社会の,したがって歴史の運動軸として作動源の行為とに,大まかにふり分けられる。けれども,よく考えてみると,規模,完全性の存否,全像か部分か……などを問わないとすると,前者には,生活にとり派生的にして,副次的なものが一つしかないが,決定的に肝要なものとして,二つを,とくに行動を保有しているのが後者である。生活＝人間にとり社会関係よりも,関係に内在する行為のほうが決定

的な運動源である客観的論理を，以上のことは，明かにしている。自覚は社会的行為に，人は人間に，社会認識は個人の日常行為に含まれる。

資本制独占の理解も，社会経済的にマクロの次元のものにとどまらず，ずっと内包的にふかまって，個別の日常事件にまで，法則の貫徹をみとどけ，ミクロの認識に，これを確定してはじめて，感性的活動としての人間の共有財になる。のみならず，同時に，肝要なことに，これを個人行為のなかに実証し，歴史的課題のなかに燃焼して，批判と抵抗の行為を含めて，認識の客体になるはずの社会現象創出にコミットし，後，生成したものをうけとめて，再び観察と分折の立場にたちもどり，連鎖の運動過程を無限に反復し生活の円環を完結する。

独占を研究するにさいして，大きな社会的単位にかかわった現象をみるにとどまって，折出した経済法則，傾向，行動パターン，習性，心情，政策などを日常の事件に確証しないのは，知性ゆたかな方法ではないし，むしろ意識的に小さなことだと一蹴してかえりみないのは，無知そのものとしかいいようがない。独占に特有なやくざの本性は，法人・機関の代表者の行為，機関的政策，部局の管理作法，責任者の言行などに，ゆたかにあらわれているはずである。独占の研究は，したがって，社会問題であるとともに，地域の分折であり，職場の解剖，市井の究明である。こうした下部単位は，独占という特異な現代の経済関係を構成する細胞であるから，独占の法則を確証するのに，そう大きな困難はないだろう。たまたま，事業所の管理者が支配体質を保有しているときには，法則がかれの作動とあいまって，いっそう権威的になり，それだけ生産効率が低落するだけのことであろう。

諸個人が生活する，そのときどきの単位が，独占の制約をうけながら，これを認識にうつしとり，批判を含めた行為をもって，再び独占にかかわるというのは，生活の現実過程が形成する内容である。たとえば，飛行機なりロケットで地上高くあがり，人びとの行動舞台となっている地上の形状・結構・位置・配置などをマクロ的にたしかめ，入手した知識をもって，地上に下りて活動を開始し，間もなく観察の対象となる形状などの形成に関与しておいて，再び，高い地上から，地状をとらえるといったふうに過程を反復するようなものであろう。一つには，対象の主体的変革によって，認識を更新するが，もう一つには，同時に一定の知識にたいして，対象たる現象の変革を通して，これにふさわしい修正をもほどこしていくという工合である。客体と認識の両者を媒介するのが，人びとの日常行動であり，個人の恒常的行

為である。行為は社会の組織として，個人とともにあり，かれに直結している。細胞が生命運動の軸にして活動源を分泌しているように，個人と社会は行動と認識を分担して専業関係を形成するが，行為は，小さいながらも，社会と認識の両者を内蔵し，自己を含めて，行動と認識の全体関連を，内部にすべて保有する。

全体認識と個人行動といったが，しかし，個別—認識と全体—行為の関連はない。この関連には，経済関係の客観的論理は，何らコミットしていない。個別的には，人びとの認識は不明確なものである。不明確を明確にするとともに，客体みずからを創出することでも，漠然としていた知識は，いっそうゆたかに，鮮明になっていく。全体としては，たしかに知識は間柄の所産だけに，個人の場合よりは，ずっと明確であろう。しかし，そこにはさしあたり，行動から遠ざかっている。知識や認識を含む社会現象にとって，決定的な作用をはたすのは行為のほうである。はじめに行為なりき。

社会を支え歴史を動かす個人行為は，人びとから全体へ，個人から社会へとよじのぼる方向をたどるけれども，行為を制約する条件である認識は，逆に，全体から人びとへ，社会から個人へと下方にずりおちてくる方向をたどって進行する。個人から社会への上向の運動だけがオリジナルな作動であって，逆の下向は，上向があるかぎりで，生じるにすぎず，ちょうど列車の進行中に電柱が背後へ猛スピードで走っていく外見の運動があるようだが，実際，そうではないのと同じように，けっして客観的運動ではない。はじめに行為があるから，はじめにことばありきになるので，逆ではない。これは，個人のみが行動をもっていることによるが，これについては，すでに社会の三つの局面を考えたとき，詳しく述べたので，ここではもうこれ以上には，たちいらないでおこう。

個人から社会への上向は，人間に本質的な間柄の拡大であるが，下向は，もう一つの，しかし，間柄ほどに大切ではない本質的側面として，自省性のふかまりである。すでに述べたように，社会的であることは，それ自体のみならず，自覚的なものも含むが，逆に自覚的なものがあったからとて，社会的なものは与えられない。したがって，自覚的というのは社会的ということの関数である。これは，認識をも含む，人間現象の発展運動にまつわる弁証法である。ここにも，行動が，個人から発する方向が第一義的にして，いかに大切かが分明になるだろう。

わたくしは，独占に関して，これをつぶすべく，反独占の行動をするべき

だなどと，直接にいっているのではない。また，実践を奨励し，行動を讃美しているわけではない。生産を含む人間生活の再生産が，この運動の連環の一つに，さけがたく個人行為と社会の知識との関連した反復過程の再生産を定住せしめ，これを含むといっているだけである。価値判断うんぬんは，人のお好みにまかせよう。これを拒もうがみとめようが，むつかしくしかめづらをした人びとを含み，かれらにおかまいなく，認識—行為—認識……の円環を，人びとの現実生活の再生産は内部にもっている。この生活の一環に，人びとの行為，価値判断は定住しているだけである。

個人の所業なり、法人の行為を評定するにさいして，〝ねっからの悪党でもないがなあ〟とか，〝あの会社ならやりかねない〟というのは，日常，市井に定着しているきまり文句である。しかし，ちょっと考えると，これは的確な評定とはいえない。生活の単位が個人であれ，法人であれ，人とか機関といった人格は，独立の項目ではなく，これが背負う諸関係を内在的黒まくとする代表的外見であり，実質的には，諸関係の次第ではどうにでも彫型可能な従属項目である。人格は，かれが活動する諸関係に帰着させても，大過ないように，人(びと)は近似値的に人間と同置して差支えない。しかし，逆は，かならずしも真でないどころか，けっして正しくはない。人間は人ではない。社会は国家ではない。国家も社会の地平をこええないし，人は人間以上には脱しえない。人格は諸関係を絶超しない。社会は，これに制約されたこうした人格を通して，諸関係は人びとを通して，所業とか行為を分泌し，歴史の審判と社会の評定を待つべく，結果を表出する。だが，結果は諸関係を，生産力は生産関係をこえない。こえない点に，人格なり労働力の正常性を明示するたしかなあかしがある。人格が諸関係の関数であるかぎり，所業を，行為の結果を，代表見本としての人に，機関人に始源を求めて，ことたれりとするわけにはゆかない。個人の道義的振動，有言不実，企業の汚職，買占めなどを，直接じかに非難するのはかならずしも，当をえていない。問題は，人格の黒まくとして，諸関係を批判することにある。諸関係がある以上，さまざまの私的背信の行動はつきることはないだろうし，諸関係がなくならぬかぎり，代表見本の個的言説はとるに足りなく，また信じがたい。逆にいえば，罪（行業）を憎んで人を憎まずではなく，科学としては，おそらく憎めないのである。

経済単位の上下位階を軸心に運動する私有の市民的経済関係——この独占がいかほど，自分の例外的優位から由来する諸結果を是正すると約束しても，

また社会的与論に強要されて，仮りに解体作業にとりかかっても，上下の諸関係をかかえたままでは，それは空転し効果なく，おそらくは，また一時的な事件に終ってしまうのがおちであろう。諸関係に一致したなじみぶかい言行ならば信じるに値しようが，両者にギャップのあるときは，ことごとく信じることはできない。お人好しにも，これを信じるとき，つかの間の幻想は，後の瞬間には，幻滅におわることになるだろう。

人格は，これが背負う諸関係を，通例は，そのまま外部に表出し露呈する。諸関係が非民主的にして，支配をことにした構造を保有している以上，これを担う代表見本にも，非民主的支配者以上のものを期待しえない。上下位階の関係を養分に生きる独占は，外にも内にも，位階を放出し，この構造を再生産する。独占の所業を，代表機関のせいにして，背後にある諸関係をみない理論的分析とか実際的反応ぶりは，人を人間にみず，人間を人にみるに類して，社会科学的にきわめて幼稚な見解と評すべく，批判されねばならない。これを是正する科学的にリアルな道筋は諸関係を変革すること以外にないが，この諸関係のなかには，幸いにも，ほかでもなく，前述の行為を，非民主的肥大，または上下位階の強化で内在的に扶養してきた民主的活動，または平等な作動として単位の現実的生活ぶりが含まれているのだから，改まって，諸関係を変革するといった大げさなものは不必要にして，社会を動かす生活単位の養分を，これとは逆な支配構造の維持に吸いとられないように，生活作動がそのまま，個人的に近く貫徹するように，日常の小さい眼前の作業でチェックすればよい。

諸関係を，変革することを含めて，動かす行動をば，私有の単位がみとめようがみとめまいが，すでに初発に開始しているのである。まさに，諸単位は，人間関係だけに，歴史的に制約された実践であり，社会的に支配された活動であるから，諸関係とその所産を知ってはじめて，この是正にとりかかる行為をはじめるのではなく，すべて行為が支配者肥大の方向にたどりつくチャネルを再支配して，自分のほうにくるようにかえるべく，努力すればよい。この変革は，地域の民主化という日常事でも，世界革命の関与でも，肝要性においては，上下の別なく，軽重の差なく，一律にひとしい。この軌道をかえる活動の手がかりが，いつどこでも，支配のお好きな分断を逆に進行する連合であり，平等関係であり，したがって個別単位の独立と理性的自意識である。支配の養分である分断一般を，独占に特異な上下の分断と合わせて消却してしまうには，程度の差はあっても，分断をうけている単位を基本

軸に連合し，上下分断がつくりだしている位階ごとに住まう諸単位をも連合にひきいれて，上下主義者を孤立に追いこむことが必要であろう。資本制独占をなくし，これもその一環にすぎない私有一般を廃絶するためには，労働の広汎な連合と中核に，独占の支配にひしめく，中小資本を含む全被治人格を大同団結し，独占をこの分にふさわしい孤独に転じるほかに，解決の方法はない。

人びとの関係が人を通して，所産・所業・行動としてあらわれるが，逆に，こうした結果が関係を，ひいては人格もかえることも可能であり，これはもう一つの，生活の運動方向である。

その人が一体何であるかはかれの生みだすもので定まる。人の本質はかれの生産である。生産はかれの職分にかかわっているから，What is he は，かれの職業をただし，生産を問題にしている。職業はその人の本質であり，仕事は男ならずとも，ひろく人間の本質である。

人の本質が生産にあるのはそもそも，何ゆえにだろうか。労働の所産である生産力が労働する組織ともいうべき生産関係を制約するように，この一環のうちに定位するものとして，人は，かれの生みだした対象によって，おのずから制約される。けれども，またこの対象をつくりなおし，決定づけるのは人びとである。生みおとす所産しだいで，この性格・内容・仕方に応じて，人は変化する。対象・諸力は，人が何であるのかの質的規定性において，かれを出産する。しかし，この対象とか諸力を生産するのはほかならず，人びとである。したがって，人びとは対象を変革することで自己を改造することになる。人びとを変革する職業においても，要人の用心棒であるか，商人であるかによって，その人を含めた人間関係は変化するし，同じ商人でも，地方性をもった財貨の生産者か、科学・芸術の普遍財貨用商人かでも，相異がある。たとえば，商人のように，対象が商品であれば，これは私的排他の細胞的対象だとはいえ，あらゆる制限・制約・拘束・狭隘を，また人種を，諸国を，社会諸層をうちぬいて自己を貫く普遍財貨であるから，商人もまた，私有にとらわれるという限界を背負いながらも，国際主義者，無際限の水平主義者として，普遍的本質を保有する。商品は掠奪を基礎にするにせよ，普遍的価値であるから，商人，また生産者も，種をこえて類的であり，起伏をこえて平等主義者であり，上下をこえて左右である。財掠奪の普遍性格は，この生産者に私的平等関係を方向づける。局部(ローカル)性格の私的財として，たとえば，利権，職務，ポスト，家縁，義理，安緒，報恩，共同体遺風ならば，この

生産者は，当然，部分的，地方的，上下に柔順にして，不平等を愛する人であるか，またこうした人に方向づけられてしまうだろう。

商品にかぎらず，科学・芸術・良心・思想・民主主義を生産する人は，もともと普遍的であるが，これによってまた，いっそう普遍的に高まっていく。この極限が普遍的個人であり，世界市民であろう。日常の事業，職場でも，年令とか勤務年限，学歴などによらず，学問・熟練の修行程度などで，給与とかポスト昇任が定まるとき，地血縁，同学，同郷，同好会，つて，えこひきなどの部分性(パーシャリティ)ならず，仕事が収入を決めるとき，これを生みだす人は，一般的であり，狭い知識，迷信，派閥，偏見，など自然性の遺制をふみこえうちぬいて，平等主義的にいっそう普遍的に伸展をとげていくだろう。これは，上下位階といった進歩の敵をうちたおし，生産の効率，良質かつ大量の作業，民主主義，人びとの解放にも，確実に通じる。

その人のふるまいにして，インターナショナル（自然生の制約をこえる）にして，門閥，閨閥ど，たて型社会に特有な派閥にかかわらないのは，かれの生産する財貨が世界を求めてかぎりなく一般向き商品であったり，芸術品であり，学問であったりなど，ともかく普遍財であるからだが，同郷とか血縁とか，まだ何となくうまが合うとかなどの前期体遺制を基準に，生活をくらす人があれば，これは否応なし，この人を，不幸にも，狭隘な視界にとじこめ，前近代人間にしつらえてしまうことだろう。生産し商う品目によって，行為の担い手である人格が定まる。

独占にかぎらず，一般に，支配者といえども，人びとの間柄なり，単位のもつ連帯の輪が拡がるのをすべて，さしとめたく望むわけではないし，そんなことはとてもできない。仮りに，そうならば，自分の維持，更には，養分の生産も不可能となるだろう。否，社会の進歩を部分的に促進するのに，力を惜しまないのでないかぎり，外観のつくろいのみならず，養分源の培養は，支配のつづく条件であり，他の支配構造が前進することを通則としているときには，なお更，これは回避しえず，積極的に推進しさえすることであろう。分断は支配の唯一の養分であり，分断の仕方（上下か左右か）がまた，支配の仕方を，同じように，決定する。だから，問題は，ひとえに連帯の拡大，社会の進歩に関する作法，実現の仕方にある。

支配者は，よらしめることは拡大し散布するが，知らしめることは制限し，とじこめる。けれども，これは一つの矛盾である。すなわち，よらしめること，従属＝支配を確定し，物的基礎をぶ厚くするためには，知らしめて，人

びとの意欲的活動を高め，単位の独立した連合をふかめねばならぬが，この活動と連合は，支配の活力を肥大するのにおあつらえむきであるとはかぎらず，両刃の剣のように，抵抗と批判をはげしくするだろう。この歓迎できない副産物を含む矛盾した過程を，十分に承知したうえで，支配者は，もう一つの筋を圧倒しこれをおさえる作法で，被圧の対象から抑圧力をひきだしながら，徒らに行動する。被圧の因子にとっては，みずからの活動がみずからをしばる作動メカニズム，独自な運動の論理にかかわらざるをえないために，これをかくす目的からも，支配者は無知と分断をひろげ，連合と自覚を封じ，ようしめるだけで，断じて知らしめないように，極力，努めてふるまう。独占構造がそうであるように，一つの制度が危機の状態で，これを醸成している内在矛盾を，なおもこの枠組でおさめようとするときは，いつどこでも，治者は，進歩開明的性格をかなぐりすて，無知と分断を，被治単位すべてに，一律におしつけるのではなく，これを上下に配列し，待遇を差別し，単位をも位階に分断するのである。上下の私有ともいうべき共同体を，私有ベースで消去した商品関係，とくに資本の世界では，これが危機になるとき，支配の作法は，上下の差別，位階の不平等関係，単位連合の分断，世界の連帯を一国主義でこわすなどとしてあらわれる。上下に位階は，旧状を保守するのに，したがって歴史の前進をおくらせるのに，またとないもってこいの迂回路である。この迂回路で，更に，進行すると，独占の支配者は，盲信と位階を，可能なかぎり，ひろく分布するが，理知と共同行為（関係）は，こっそりと，いそいでまたこまめに回収する。

資本内上下位階としての独占構造では，マクロ全像として，すでに下が上になり，下克上が終了し，労働が資本を再支配しているが，これが発展にかかわらない生成にとどまり，支配に結びついた現実の歴史では，労資を上下に分断して，一部の資本を破産に追いこみ，この人柱を基礎（ベース）として，分断の構造をかさ上げする。このミクロ部分の現実像では，かさ上げに支えられて，上下の本来的状態を旧状に濾過して，上下を，労資を，なおまたととのえる。

小さくは，第2組合をつくる労資関係，輩下一人びとりに，また下請単位ごとに，他のすべての人・単位を，程度を異として，難じてふきこむ，特別待遇の外観をよそおった，その単位・人の孤立化をねらう上下の分断の管理システム，価格を差別することによる人びとの上下分割と連合の阻止，また大きくは，労資の基本的階級をあいまいにする二階級内部の上下への分裂から，帝国主義列強の植民地主義にもとづく諸国の上下分断にいたるまで，列

挙すれば，さまざまな変型が識別できる。

独占の活動する本質的な活動舞台たる資本蓄積において，このいびつな部分構造をとらえるならば，次のようにはいえる。すなわち，独占は，資本蓄積は否定しても，資本は否定しない。蓄積は否定しても，集積は否定しない。集積は否定しても，(累) 積＝上下位階は否定しない。独占は，したがって資本の位階であり，価値内の上下関係である。集中が集積を，生産の社会化が資本を，左右の排他が上下の排他を，人びとの連合が私有を消去することで，上下位階を，資本を，私有ともども，これを一組になって支えた協業，賃労働，商品関係を解消し，自他すべてをほうむる全面止揚の歴史的段階——この段階でなお，従前のように，左右の側面を生かし，このために新しい上下の側面を，独りよがりに，他を犠牲につくり，私有を保守するのが資本制独占である。

上下主義者としての独占構造，位階の経済関係を軸心とする独占資本は，ことがらの公開と透明性を，ことのほか恐れる。けだし，これは，疑いもなく，人びとにことがらを知覚させるに，平等の距離に配置し，同等な資格でコミットし，連合を促し，ひいては，上下とは逆の水平方向へ，人びとともども，社会を方向づけるからである。また，上下分断の拡大は歓迎し奨励するけれども，共立は阻止しいみきらう。けだし，自己の保存が上下に養分を求めて成立しているからだ。更に，独占は，諸単位の平等のかわりに上下を，連合のかわりに分断を，公開のかわりに秘密を，予告のかわりにぬきうちを，果し状のかわりに闇うちを，ルールのかわりに恣意を，合議のかわりに独善を，求めてやまない。価格政策，市場占有率競争などの行為では，とくにはげしい。自分は掠奪するが，他からは掠奪させない。自分のものは自分のものだが，他のものも自分のものである。自己は独り，文明開花に位置しなくてはならないが，他はすべて無知蒙昧にあらねばならない。自分は他よりも，何がしか多い利益のある事項を保有し享楽しなければ，心安らかではない。自分は利己的に保身のためにすべてをおこなうが，他が自分と同じことをなすのはゆるせない。他が自分よりも，すべてに関して何がしかすくなく所有することではじめて，他の存立を許す心情類型，初夜権を求める領主的衝動。他に重ねて，つねに自己の多いことでくつろぐ行動パターン……。敵対的相手のなかに，被治者としてうちひしがれた苦悩を，自分のなかに同感するが，自分のみじめな状態はみとめない。また，他人のなかに，自分の零落した姿を予想せしめず，優位のみを思い知らせる。独占は，ある意味でスミスと反

目対決する経済関係である。けだし，独占は，市民社会のなかに異質として，再生した非市民社会だからだ。

だが，水平，平等，連合，同感，市民社会，……諸単位が上下と反目する左右方向の系列にあるとき，精神財を含めて，すべての財貨の生産にとって，生産的であるから，それは社会進歩にも相通じる。所詮は勝ち目のない歴史の前進と，これを支える因子に敵対し，非文明を代償に，暫らくの間は，みかけだおしの栄達を享有するのがほかならず，独占の宿命である。

何ゆえに，上下位階が必然的なのか，位階は一体，どこからくるのか。それは位階である。位階は位階を再生産し，強さに強さをよび，弱きは，弱いものを，いっそう弱める。まさに酷薄非情の社会状況である。上下が上下を再生産するのを説明して，ある単位の private にまかせず，reprivate しかえす，もう一つの単位が欠けているとか，再掠奪するに徴力にとどまるからだといってみても，それは同義反復でしかない。問題は，独占の巨大さは，上下格差がアンバランスに過分である点に求められる。上下は単位の相対関係であり，けっして絶対水準ではない。単位間の関係がどうあるかで，独占に威力があったり，それほどでもなかったりする。

以下，ちょっと迂回して，独占にはすぐれて特有な力の内的構造，社会的力学のメカニズムと，暫らくの間，すこしお付き合いをしてみよう。

一般に，人びとが畏敬したり崇拝したりするのは，この客体に固有な力がはじめから備わっているからではなくて，力を感知し，ひれふし拝む民衆，従属する人びと，希求する諸個人，こうした人びと相互の内部関係にひたすら依存する。この相互関係が一定形態の仕組におかれると，これを通して，人びとの相互におりなすことから生じる活動が，この客体に力を保有すべく，奇異にも，力を貸し，養分を与えるのであり，さしあたりこれが意識的か否かに，かかわらない。拝み敬うのは，客体が力を備えて傑出しているからではなく，力を衆生が与え，固めて強くしているからである。したがって，拝み服する行為と，強くし畏服せしめる力をつくっている行為とは，いつも同一主体の事項であり，かれの活動を区別する不可分の二側面である。

自己にふりかかってくる力を，支配として再生産する培養因に役だつのは，私有の衆生であるには，何のかわりはないが，衆生のうちの一つの側面，すなわち，共同行為また結合労働する人びとが被造物の負荷に耐えて生きる生活の面，換言すると，共同の活動は遂行するものの，盲目的におこない自己を失っている人びとの生活，物象にまとめられる人びとの共同行為である。

もう一つに，客体を拝み服するのは，人びとが自覚的にして，自己を回復しているのだけれども，この状態が社会の全面にひろがらず，家族，同好会，うさをはらすのみ屋など，局部的にとどまる生活，自覚性の孤立した状態にあるからである。あるいは，人びとの計画意識的行動が分断をこうむって発散しえしまい，力にならない生活——これが客体を拝む人びとの側面である。支配構造を強くするのは，人びとの生産関係であり，生活の社会的側面であり，例のごとく，人びとの相互関係であるけれども，逆に，人びとの生産力，または生活の私人的側面，あるいは個々の人びとと客体との関係が，人びとを客体に服せしめ，ひざまづかせるのである。一方では，強める作動がとびだすのを濾過する網として，物象の支配という私有に独自の関係が客体を強くするのだとすると，もう一つの人間喪失の現象として，跪拝を決定づけるのは，客体一般をうけとめる自省の前にたちはだかる，分断という抗しがたい濾過組成である。人びとの活動を吸収して物象はふとり，ぶ厚くなるが，この物象はまた，物的基礎になって分断をいっそうかため，明日の物象化をいまよりもずっと，大きくしていく。たとえば，宗教の偶像崇拝をつぶさに視察してみると，仏の前にひれふしている善男善女は，主に孤独な一人びとりであり，たまたま社や仏閣で会い同席しても，相互疎縁の集合にすぎず，孤立を消せない。孤立して独りぼっちになるほど，崇拝の念はいっそう高まり敬虔になる。これに反して，祭礼，遍礼行脚，お寺詣など，人びとが連合するほど，崇拝の念と行(ぎょう)はきびしいものでなくなり，陽気なピクニックに類するものに転じる。一個人でも，人のいない条件下のほうが，衆目を集める条件下よりも，人びとは，信仰心をいっそうたぎらせ，うやうやしくふるまい自省をふかめる。敬虔度，崇拝の状態は，人びとの分断のふかまりに確実に正比する。この分断は，また物象の負荷程度と一致するから，人びとが自己を失い盲目的であるほど，作動・活動を吸収して，物象化が分断の間隔をいちだんとひろげて，いよいよ跪拝を完全なものにする。物象と分断，客体の強大ぶりと跪拝，この二つは相互に連動している。しかし，肝心なのは，支配を強める方向であり，上向の道筋であるが，下向の道筋，支配をうける方向は副次的である。

ところで，人びとが求め服し拝む客体には，基本的に，三つがある。宗教仏（神），国家（私有主），貨幣（商品選良(エリート)），この三つ。いずれも，私有の，社会の現象だけに，これを支える人びとの経済関係には，ひとしく，同一の論理が貫徹している。私有のエッセンスが商品関係だから，この細胞，商品

の派生物としての貨幣は，宗教，国家の畏服客体をも，濃縮して内蔵しているはずである。貨幣論を述べる文節で，マルクスが宗教とか国家を多くひきあいにだしているのは，偶然でなく，畏服の客体を，もっとも本質的ベースで確定したのが，かれの貨幣理解だからである。貨幣は，すべて人を服せしめる私有諸関係のシンボルにあげられるだろう。貨幣論を，それ自体としてとりあげ，背後にある経済関係を考えなかったり，物神の密度の高いサンプルとして，かれが使役しているのに，理論操作に無感動にして無知なのは，何といっても，お人が好すぎるといわざるをえないだろう。

客体の人びとへの関係が威圧的かサービスにとむかは，かれら相互関係の一点に依存するので，けっして客体の物性から生じるのではない。偉(えら)い人は，実際，多少にも偉くした結果であるし，まして支配者としての暴威は，これに被害をこうむる人びとのつくりだした所産にすぎない。公害もそうならば，ひと昔前の貧困も，人びと相互の関係でひたすら定まる。私有単位が保有している物象と分断（分割と支配，抑圧と孤立，孤独と威圧）が相互間に，いびつな組合わせにあるとき，物象—分断の平等関係は不平等に転じる。

これが外に表面化して単位間の格差として固定化する。たとえば，独占がそうである。

現代に特有な私有構造の代表格である独占資本とても，固有な力をもとから保有しているわけではない。これは，構造の内外に属する諸単位が，確立した一定のメカニズムを通して，活動から発するゆたかなエネルギーを養分に吸いとられて，いっそう強くなり全能になることに，力を貸して，支配の座を固めてあげている結果である。支配する被養者と扶養する被治者の相互の関係を，上下ぎらいの資本相互間にも再生し，しつらえ整備して，このかぎりで，不可避にも，労働の上下関係をも生みだすやくざ資本主義，あるいは資本内やくざ主義——これを，独占構造と，われわれは考えている。

このあたりで，説明の迂回をとじて，もとにかえろう。

独占がどのように成立するかは，本論でもとりあげたので，ここでは補足をかねて，成立した独占が巨大な力を維持し噴出するメカニズムに，ちょっとふれておこう。

独占が資本内上下の経済関係として成立してきたのは，上下を切削し平準化を促進する要因すべてを排除して，この作用を阻止したことに，一つの大きな原因をみいだしてもよいだろう。独占にのしあがるために必要だったこの努力は，成立しきった現在でも，再生産メカニズムのなかに生きている。

独占は水が低きにつくのとは反対に，高きにたどりつく至難なことに類比すべき，上下関係を一般軸にしながら，左右関係を特殊個別の部品にもする再生産を，機構的に創出している不均衡の関係だから，たえず左右を一般軸に転化するねずよい傾向が抗しがたく作用しつづける。これに耐えて，上下位階を維持していくには，多大の努力が独占体をはじめ，この構造に関与する諸単位に求められる。まえにも述べたように，上下の位階の維持は，下部の養分汾出の生産者が支配因に剰余を供与して肥とらせるからだが，肥って巨大になった支配力を再び生産者に向け，さきの剰余が剰余を生む生産者の賃報酬となったとき，剰余が剰余を生産して，この独占構造ははじめて，確立する。この剰余とはいうまでもなく，独占利潤。この機構の成立は，上下位階の構造が一般にそうであるように，単位間の微少な格差のかなり長い時間にわたる累積の所産であり，一時的に諸手段を適用できるときでも，これをしつらえ用意したくわえるまでは，単位間格差の温存を，かなりの一定期間，この前座的作業としておこなう必要があった。格差がかなり大きくなると，私有の原則によって，格差がいっそう大きな差別をよび，力はいちだんと強い支配を招きよせ，支配がいっそう専制の座をぶ厚く固めるのだから，これを逆にいうと，すこしでも平準化に手ごろころを加え放置しようものならが，独占が主客，基副を逆転した不自然な経済関係だけに，単位間の間隔はなだれをうって弱まり，独占の構造自体をゆるがすように作用するのは必至だろうから，いかなる構造作業でも，上下がために細心をきわめ，左右は無慈悲に削りとらねばならない。かつて独占の成立にさいして，蟻の穴から堤がといった微細な努力を求められたのを，独占は，再生産メカニズムの維持に再生して，上下の平等化に通じる要因ならば，いかなるものにせよ，すべてみのがさず警戒をおこたらない。独占が資本内市民主義をきわめて恐れるのは，機構の成立に，この絶滅が条件として働いたからであり，また強大になった今日でも，機構維持に働いているからである。したがって，独占にとり，市民主義はなお最強の敵であり，自己の体質との間に，がん細胞と正常細胞が，相互に両立しないように，市民主義はうけいれようがない。

因みにいえば，市民内市民主義の普遍的実現こそ，現代の歴史課題であり，史約実践としての人間がコミットせざるをえない方向である。独占体が恐れをいただくことと，巨大な絶対力は，一見，矛盾するようだが，同一の根基から由来している。巨大資本がこの巨大ぶりにものをいわせて，位階の維持に寛大になる瞬間，動向としてはすでに，それは巨大ではなくなっている。

巨大さはひとえに，独占が恐れる資本内市民主義をおさえるにとどまらず，細心にこれをのこさない徹底した阻止と警威ぶりのたまものである。巨大であるがゆえに，細い注意が求められるのであり，細かく作業するがゆえに，巨大なのである。細かいことに不注意になるとき，巨大さも，またたくの間に瓦壊する。強大な独占体は，日常の小さな事件にいたるまで，こまめに神経を配分して，こみいった芸当には，市井の人びとを驚かせて考えこませる。これは，価格づけ，販路戦略，政治の利用，競争者の取扱い……などの史実が多く教えるところである。支配が完全であるほど，これを守る作業は，微細をきわめて，小さな事件にも，浸透する。けだし，独占にとって，再生産の養分が単位間の上下の分断と位階だから，これは当然であろう。上下がなくなれば，日を浴びたドラキュラーのように，独占は一日も生きていないだろう。

独占は，上下に弱いところに重点的に喰いこみ，これを挺子に，がん細胞に類した上下位階という特異な資本関係を増殖する。がんに養分を与えるのは，絶命に通じるほどに，破壊作用を被むる正常細胞である。この正常細胞が disorder に，上下に因子配列をうけるところに，がんに比定すべき独占構造にとって問題の物的基礎がある。

上下が左右に収斂することで，価値均衡が実現できた経済関係とは，内容的にいって，強さが弱さをよび，逆に弱さが強さをまねいて，間もなく，諸単位相互間に力が均一になり，平等関係に落着するという状態であり，理論としては，資本一般の抽象度にして，歴史段階としては，古典的年代である。これに反して，強きをたすけて弱きをくじくために，強弱の上下格差が固まるか，拡大するのが独占に特有する現象であり，これは資本個別の抽象度に照応する。強さが強さをよぶ不均衡の拡大は，資本一般でも，たしかに異なる階級間でははっきりとあった。しかし，同一の階級については，これを欠いていた。労資には，一つの側面における資本の蓄積は，もう一つの側面では，貧困の蓄積だった。そして両者は，いよいよ間隔を拡大した。しかし資本同志では，こうした同類の位階はまったくあずかり知らない現象であり，たといあるとしても，一時的に自立化するが，ロングランには消失する集中現象にかぎられていた。独占では，ことがらは変化する。

こうして，独占は，支配の位階であり，上下の分断であり，諸単位間の抗争する相対的格差であるが，けっして支配力の絶対的水準にはかかわらない。この水準も，人びとの間でつくられる所産であるが，当初から与えられてい

たものではない。自然界ならいざ知らず，社会現象では，はじめに諸関係（創主，ことば，行為）はあっても，はじめに力（支配）ありきはありえない。また，もとから非力にして弱いものもない。強いのは強くした結果であり，弱いのは，弱められたものでしかない。力の絶対水準も可変ならば，この水準がどのようなものにせよ，相対的格差，私的行為のアンバランスも，固定的ではない。絶対的水準の高低に無関心であり，相互格差だけに関心をもち，この格差も可動的にあらわす作法を保有する支配の経済関係こそ独占である。

独占という変形した単位細胞が群生するところ，またこうした再生産のメカニズムが作動するところ，いつどこでも，上下の位階はあるから，絶対的にみて，経済力がいかに微弱でも，これがかかわる被治単位がこの力に服してしまい，支配の野望を充足せしめるほどに，いっそう未発展，また無抵抗であれば，もう立派に，この貧相な資本（私有の現代単位）にも，独占という社会的形態を付与するに十分である。逆に，かなり強い支配力をもっていても，人びとが集結じ，それだけ反撥力も大きい条件のもとでは，養分源として上下の格差は形成しえず，主観的企図はこっけいな思いあがりに化してしまい，独占は育たない。同一の商品が販路地しだいで，価格に格差が付着するのが所産の領域における独占に特有な現象であるように，この所産の一環でしかない力も，定位する場所が相異となるにしたがって，支配関係としての独占が存在したり，しなかったりするのである。価格が商品に制約されなかったり，経済関係が力に相対的に無関係になることにこそ，社会に内在する諸単位の上下位階がかくれている。

こうなると，極貧の資本でも，独占たりうる。マイナスをプラス，否，ゼロに近づけても，格差値が生まれ，これがもうけ（プロフィト）になる。もうけは符号とか絶対値にかかわらず，差額である。同じように，独占は諸単位にのしかかる差額行為だから，貧相な独占は，まずもって，一定の物件を不法占拠し法治当局がこの返還を求める手順をつみ，いよいよ執行のはこびになるまでは，不法を合法の外観でよそおい，不可侵の業務として，無事平穏，かなりの長期間，ずるくもうけを享有する。弱める行為を含み，弱い単位に力をおしつけ，搾取するとか，別段に弱くもないときには，否，弱くならないとみたときには，情報不足の (ill-informed) 状態につけこみ，間もなく，息をふきかえし強くなるとか，連合が育って不当性に抗議しはじめるまでは，格差を貧ぼり，支配を固め，自分の独占を肥らせるのである。いかなる人だってあるは

ずの人の欠点とか弱みとかいった，いわばマイナスの財貨を材料に，出刊とか公開をちらつかせておどして，これを防止する市民的安堵ともいうべきゼロ財貨に転形加工し高めるのに，これとひきかえに，巨額の金子(きんす)をまきあげるやくざのように，これを資力のとぼしい独占はおこなうが，かれらには，これ以上にもうける財源はない。しかし，もうけにおいては，巨額を投資して巨利を入手するのと，本質上，何の差異もない。

支配力において，力の水準が高いか低いかは問はず，関係間の相対差はもとよりのこと，同じ力との相対関係に格差があるときにも，支配を内的本質とする独占は生まれる。独占の独占たるゆえんは，まずもって，経済的同類（資本間）の支配において成立するので，さしあたり，経済的異種（労資間）支配においてではない。同類支配を確定した後に，異種支配にも，プリズム分光器のように，人びと次第で色調をかえる抑圧力はひろがる。同類格差を養分とする上位体独占主として，市民社会外の水準（共同体遺制）を市民社会内水準に，かろうじてはいりこみ同化をとげるのに同意する報酬として profit するやくざ変型から，同じように，小額の資本をかけて，低水準にある同位の無数単位を支配する貧弱な市民型の独占，更には，大企業に特有な，巨大投資と巨額の利潤を入手する選良変型にいたるまで，支配の力と形態の相異はまぬがれないけれども，独占の養分たりうる上下分断を元手に稼ぐ治者としては，貧相な資本主は，ゆたかな資本主にもまさるとも劣らぬ恵まれた状態に，堂々と定位している。

生産グループ，企業，部門，経済地区，地方など，分布のひろがりごとに，起伏の程度をさまざまにして，同類格差をもった独占構造が割拠し散在している。構造内部に上下分断があるにとどまらず，構造間にも，高低まちまちの位階がある。高位にある大企業の独占構造は，中企業の独占に攻撃をかけて，吸収合併する能力には不足はないが，この行為は無条件ではない。資本の私性からして，行動はつねに二面的に，両刃の剣としてあらわれるから，こうした集中をおこなえば，場合によっては，各段階に配列してある諸独占構造の間の貧富を均一化し，構造内部の上下にも連動・波及して，これを平準化し，位階に発する養分を平等化を通して，非養分に転化し，独占の生命を枯渇しかねない。こうした危険のまったくない確実な保障でもないかぎり，独占は，構造外の併呑には手をださない。現実にもあるように，この行為にふみきるときは，危険をカバーして，なおも独占に有利な場合である。イチトフキンが述べているように，中小企業の専門業務に独占体は参入し，この

生産を遂行するには，ありあまる能力と資本を育てもっているが，参入が利潤率と利潤量を低下したり，すくなくしたりするのを考えて，参入をさしひかえ，依然，従来のまま，中小企業に，この生産部門を委ねる。利潤率・量の低下は，参入した独占体の巨大な産出高がもたらす価格の下落によるけれども，価格は経済関係の集約表現だけに，価格下落は，下部単位を，水没に追いこみ，独占体がみずからが代位することで上下間のもう一つの支えをつぶして，したがって養分源を消去してしまう。独占には有利なはずの，下部の劣位を，みずからひきうけて，上位に高め，それだけ，社会的労働支出を，価値としてすくなく実現し，価格の低落をもたらし，たまよけ，ふみ台，人身ご供，などを失う。子分を消しては，かさ上げならず，さか下げで，自己を弱めることになるから，これに，独占が積極的なはずはない。しかし，一定の異常条件では，この手段に訴ることもあるし，実際，訴えている。

特定の独占が作動したか，他の独占が働きかけたか，いずれにせよ，弱くなった資本単位にくいこみ，これを挺子に支配を貫徹完遂して，これからしぼりあげた活力・エネルギーを，自己の肥大に吸いとって結晶し，エネルギー作動源の被治単位の抑圧にふりむけるにとどまらず，独占は，ぶ厚く肥ったこの支配力を，こともあろうに，単位以外すべての方向にも，程度を差別して，ふりむけ，消滅をはかるべく攻撃の武器にとなし，構造の内外にわたって支配の網の目をめぐらす。独占は，構造外にとどまらず，構造外にも脱して，私有全体に支配の網をひろげつくりあげ，まさに文字通り，自己をのぞいてすべてと反目敵対して，孤立をふかめ，独占のもう一つの側面として，単独になって，自分を完結する。独占の支配力が作用した被害には，構造外単位も，無関係でなく，すでに被害者である。やくざによる被害がかたぎにも及ぶのと同じだろう。さわらぬ神にはたたりなしとか，長いものにはとかいって，事件にコミットせず，結果的には，不法行為を黙許することが，これを積極的に力を貸す行為におとらず，否，これ以上に，やくざをはびこらせるゆたかな培養源となるかぎり，同罪を犯していることになるのは確実であろう。些細なことでも，これをみのがさない毅然とした日常の抵抗と抗議の姿勢こそ，独占の巨大さがねざす支配の細心の努力がそうであるように，累積のはてには，巨大な反独占力に転化するはずである。被害が直接に，自分にこないからといって，これをゆるすのは，独占の支配を援げるもう一つの大切な養分である。この養分保有者を上下に分断することで，独占は，抗議を直接の被害者の限度にとどめて，あるいはおどしで，あるいはすかしで，

あるいは権力で，あるいは金で，仕末をつけるのに，安んじて精進しうるのである。だが，再支配する諸力の絶対量からいえば，疑いもなく，構造外の無関心諸層，〝まあまあ〟主義者，一口にいって，一般市民がもっとも多くの可能性をもっているだけに，独占の維持強化に，かれらは，もっとも大きな援助をしていることになる。

公害の散布から，インフレーション，失業，合併・吸収，計画倒産から，買占め，組合分断，協組的企業の阻止，価格差別化……などにいたるまで，独占による被害は，直接利害関係のみならず，私有に生きる現代人のすべてに，程度の差はあっても，付着するものだという点を知らねばならぬし，知ったからには，眼前の手のとどくところから，これを日常生活にとりこみ，自覚的に歴史にコミットとしてふるまわねばならない。独占が直接に被害を与えない単位の多数分断を肝心の養分とするだけに，もっとも被害のすくない単位の最大限の憤怒と抵抗がかえって，第一義的に大切である。このために，市民の広汎な連合が決定的に働くために，ここに歴史的な義務もある。

この独占に関しても，一見，迂遠にして，彼方の国の事件だと思われることが，われわれの住む国のことに直結して，両者はヤーヌスの頸になっているのみならず，同じく，制度の世界分布をこえて，日常，眼前に介在する小さな事件，細かい現象が，同一の構造本質を，一国の社会現象，国際的出来事に発現して，器官と細胞の相互関係で結びついていることも分明であるから，資本制独占を研究するにあたっては，われわれは，これを，方法的に自覚してきたし，今後もこれを一貫していくことであろう。